

ニュースレター

NO.69

発行/NPO法人市民活動サポートセンターいなぎ
事務局/〒206-0802 稲城市東長沼 2112-1
稲城市地域振興プラザ 1F
TEL 042-378-2112 FAX 042-378-6971
E-mail : info@i-inagi-support.org
http : //www.i-inagi-support.org/

NPO講座 協働の新たなステージ

多様な関係を理解し合う アフターコロナの 協働のありかた

3月5日に長浜洋二さん（モジョコンサルティング合同会社 代表）を講師にお招きして、標記のテーマで講座を開催しました。

コロナ禍以降、市民活動団体が行う会議やイベントはZoomなどのリモート開催が当たり前になっていますが、そんな中で徐々に講師と受講者が同じ会場で直に顔を付合わせて行った貴重な講座でした。

● VUCA の時代こそ協働による取組みが必要

長浜さんによると、今はVUCA（ブーカ）、すなわち私たちを取り巻く環境が複雑さを増し、想定外の出来事が次々に起こり、将来の予測が困難になっている時代だということです。

※ VUCA とは英語の変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の頭文字をとった造語

そうした時代にあって地域課題を解決するには、単体の組織や個人による取組みには限界があり、今こそ協働による仕組みが必要だということです。

ではどうしたら協働できるのか？そのことについては、活動のステージを次の4つに分けてステップアップしていけば良いと説明してくれました。

step 1 単独 = 他者とのつながりはなく独立・孤立している段階

step 2 交流 = イベントやSNSなどで個人と組織、組織同士が知り合っていく

step 3 協力 = 単なる顔見知りから一歩踏み込んだ関係が構築される

step 4 協働 = 共通の目的を掲げ、その達成のために、それぞれの役割を分担しながら、対等な立場で自主・自律的に関わっていく



● 町田市市民協働フェスティバル 「まちカフェ！」の取組みから

長浜さんは、町田市の地域活動サポートオフィスにも事業統括ディレクターとして関わっており、協働の具体的な事例として、同市の「まちカフェ！」の取組みについて紹介してくれました。

従前から市庁舎を会場として開催していた「まちカフェ！」は、コロナ前の2019年度には、来場者数9,100人、参加/協力団体数141団体という大規模なものだったそうです。

しかしコロナ禍になって、そうしたイベントも開催出来なくなり、冷静になって振り返ってみたら、従前のイベントは単なる“まつり”で、協働でも何でもなかったことに気付いたそうです。

そうした反省の上にならって2020年度に取り組んだのが《「まちカフェ！」10days》。従来の市庁舎開催に替わり、オンラインや市内分散開催という新しいスタイルで10日間開催したそうです。

特筆すべきは実行委員会の持ち方でした。希望する方は誰もが実行委員になることができ、会議は6月～12月の間、月1回Zoomで、しかも昼夜2時間ずつ開いてきめ細かく意見を吸い上げ、実施に移していったそうです。

今はまだ活動の多くが「協力」の域にあるそうですが、その中の一つ「こどもアクション」についてはすでに「協働」の水準に達しており、今後他の分野にも「協働」の試みが広がっていけばと期待を寄せていました。

市職員が市民活動を体験 市民協働研修で初の試み



発表会でのプレゼンテーション

本年度の市民協働研修は、初の試みとして、市職員が市民活動団体の活動に参加する体験型の研修プログラムを実施しました。

これは、職員が実際に市民活動団体の活動を体験することによって、市民活動をより身近に感じ、協働に対する認識と協働のまちづくりへの理解を深めるとともに、何よりも、研修で体験し感じたことを今後の業務の中で生かしていくことを目的としています。

今回の研修にあたり、市の人事課から相談を受けた私たち市民活動サポートセンターいなぎでは、研修の趣旨に全面的に賛同し、研修生の受入れ先として右記の9団体とのコーディネートを行いました。

研修は、入庁5年目のグループリーダーと1年目の職員の3名で1つのグループを構成し、それぞれの研修先となる団体を事前に訪問してインタビューを行い、団体の活動の意義や課題などを整理しました。そして後日、実際に活動に参加し体験することによって、行政としてどのような支援ができるか、また、自分自身はその団体に対して何ができるかを考え、去る1月27日に中央文化センターホールで、これらの研修成果をプレゼンテーションする発表会を行いました。

今号のニュースレターでは、初の試みとして行われた今回の体験型研修を特集し、発表会での各グループのプレゼンテーション内容を中心に、市の職員が市民活動団体の活



サポートセンターでの研修の様子

動に実際に参加して何を感じ、どのような課題を発見したかを紹介します。

市民と行政が協働していくために、今後何が必要なのか考える参考になれば幸いです。

職員研修を実施した市民活動団体

- ① **ボランティアサークル はらっばの会**（子育て中の母親支援）
- ② **NPO 法人 友遊クラブ**（障がい児の放課後活動支援）
- ③ **いなぎ FF ネットワーク**（地域の中・高生の居場所づくり）
- ④ **くらすクラス**（多世代間交流・ローカルコミュニティの形成）
- ⑤ **稲城グリーン化プロジェクト**（再生可能エネルギーの普及）
- ⑥ **稲城七つの子**（障がい児童とその家族に対する地域でのケア）
- ⑦ **NPO 法人 支え合う会みのり**（高齢者の配食・会食サービス）
- ⑧ **NPO 法人 ふれあい広場ポーポーの木**（居宅介護支援・ひとり親家庭支援）
- ⑨ **NPO 法人 市民活動サポートセンターいなぎ**（市民活動団体中間支援）

（順不同）

ボランティアサークル はらつぱの会

研修生：小澤美紀・小林千恵・清水英里香

■ **研修受入れ団体の紹介** 子育て支援を通じて、会員ひとりひとりが笑顔で楽しく、生きがいを持って活動することを目的としています。地域の保育園行事に参加して、わらべ歌や折り紙などの伝承遊びをしたり、お母さん方に向けた「わらべうたベビーマッサージ」を通して、子育てがより楽しく行えるようお手伝いをしています。

■ **研修内容** ハロウィン兼7周年イベントを、向陽台の城山文化センターで行いました。当日は工作コーナーと塗り絵・お絵描きコーナーを作りました。また、別の部屋で読み聞かせも行いました。

■ **所感** イベント当日は雨が降り、気温も低かったので、参加者がいらっしゃるのか、イベントが盛り上がるのか不安になりました。しかし、沢山の家族が遊びに来てくださり、はらつぱの会が地域で頼りにされていることに感動しました。新型コロナウイルス感染症の影響で、多くの子どもたちが家に引き籠もりがちですが、改めて外に出ることの大切さや家庭以外のコミュニティの必要性を感じました。

■ **研修で考えた「稲城市がサポートできること」** はらつ



ぱの会は固定した活動場所がなく、マンションの1室で活動したり、公民館等が空いている日に活動するなど、安定した活動ができていないなどの課題を抱えており、安定した活動が行えるように空き店舗など空きスペースの情報提供ができるのではないかと考えました。

また、オンラインの活用も提案したいです。オンラインに詳しい会員がいない、機材がないなどの課題を抱えています。この課題を解消するために、オンライン開催に向けての講座を企画したり、機材の貸し出しができればと考えました。オンラインでの活動が実現できれば、活動場所がなくても安定した活動が行えるようになるのではないのでしょうか。

NPO 法人 友遊クラブ

研修生：熊谷遥・檜野泰巳・松井有紀

■ **研修受入れ団体の紹介** 友遊クラブでは、障がいがある誰もが等しく、生き活きと社会生活を送ることができるよう、様々なことを仲間と共に体験する場を提供しています。余暇活動の充実を図ることを基本に、集団性を生かして協調性を身に付け、地域との関わりを通じて社会性を習得できるよう、障がいのある方々の豊かな生活の実現へ向けて支援し、社会全体の利益の増進に寄与しています。

■ **研修内容** 組織の変遷や活動内容・課題等について、職員の方にインタビューしました。また太鼓演奏や創作活動等を見学しました。他にも、利用者とのふれあいとしてオセロ、人形遊び、カードゲーム等を行いました。

■ **所感** 友遊クラブの利用者と活動と一緒にいる際に、初めは障がい児と接することに身構えましたが、実際は一人ひとりの個性として理解することができました。

この体験で、活動を始める前に持っていたイメージを払拭することができ、友遊クラブが掲げる健常者と障がい者の差異を埋めるという理念について、体験を通して理解を深めることができました。



■ **研修で考えた「稲城市がサポートできること」** 研修をとおして考えたことは、公園や運動場など場所の提供や地域交流事業の発案、保護者向けの制度紹介などです。

いなぎ FF ネットワーク

研修生：石川真也・伊藤直樹・加藤綾

■ **研修受入れ団体の紹介** 城山文化センターを拠点に、放課後の中高生の居場所づくりに取り組んでいます。中高生の子どもたちが、親でも先生でもない第三者との関わりを持つことで、多感な思春期を上手に乗り越えていくことを願い、「ホッとくつろげる居場所づくり」を目指しています。

■ **研修内容** 子どもたちに理科・数学・英語の学習支援をしました。子どもたちが学校の宿題を進めている様子を見ながら、手が止まっている生徒にはこちらから声を掛け、一緒に問題を解きました。期末試験を控えていたこともあり、試験対策なども教えました。

また、子どもたちと一緒にバトミントンもしました。子ども対職員の試合では、2対1で子どもたちの勝利となりました。子どもたちの体力には大変驚かされました。勉強だけではなく一緒に体を動かすことで、子どもとの心の距離が近くなった気がしました。

■ **所感** 子どもへの学習指導のために、予習を欠かさないスタッフの姿に驚き、活動に対する情熱・意欲を強く感じました。また、プレイルームで遊んでいる子どもた



ちの心底楽しそうな姿も微笑ましく感じました。多感な思春期の子どもたちを相手にする活動はとても大変なことではありますが、その分やりがいに繋がると感じました。

スタッフにはFFネットワークの卒業生もいて、改めて素敵な組織であると実感しました。

■ **研修で考えた「稲城市がサポートできること」** 市が現状行っている補助金の交付や活動場所の確保等のサポートは、これからも継続できればと思いました。

広報の面からも、もっと積極的にサポートしたいと考えました。例えば、市民が転入する際の配布資料に団体紹介のチラシを加えることなどが考えられます。このようなサポートにより、市内に転入してきたばかりの青少年に対して、学校や家庭以外の居場所があることを伝えられるのではないのでしょうか。

くらすクラス

研修生：鍋田祐介・熊谷康祐・北岡和也

■ **研修受入れ団体の紹介** 稲城長沼駅の高架下を拠点に、地域の方が主役となって、多世代が交流できるコミュニティづくりを進めるため、楽しい学び、わくわくする集いの場を提供しています。

運営は、東日本旅客鉄道(株)、(株)JR中央線コミュニティデザインが行っています。

■ **研修内容** 地域コミュニティを生み出すきっかけとなる多世代交流の場の取材・体験を行いました。老若男女を問わずゆるやかな交流の中で、人と人との多様な繋がりを育くむ「始まりの場所」づくりに参加したことで、市民協働で感じる楽しい学び、わくわくする集いの場を体験することができました。

■ **所感** JR東日本がくらすクラスを設置・運営している背景として、経済構造の変容や交通インフラにおける競争環境の変化があります。既存事業である鉄道の利用客減少に対し危機感を抱き、地域と一体となったコミュニティの共創を、新たなソリューションサービス事業として提供しています。

私見としては、公と民がパートナーシップで持続可能



な開発をボーダレスに行える環境整備が求められていると認識しました。

■ **研修で考えた「稲城市がサポートできること」** くらすクラスで行われているコミュニティ創生事業は、1～2年という短いスパンでは成果を評価することのできない公共性の高いものです。

運営においては、JR東日本の出資に依存しているため、同社の経営判断によっては事業の持続性が担保できない状況にあります。

そのため、財源支援策として魅力的価値創造をターゲットとした、ふるさと納税制度を、市との協働事業として計画することが解決策のひとつと考えられます。

稲城グリーン化プロジェクト

研修生：篠田亜沙美・砂川恵梨・吉山綾

■ **研修受入れ団体の紹介** 循環型社会の実現をコンセプトに、小規模再生エネルギーの活用を実現し、大災害時の補助電源や常夜灯等に活用できることを目指しています。現在は小型の水力発電機を開発中です。

また清掃活動や、啓発活動として近隣団体とともにイベントへの参加、イルミネーション等を企画しています。

■ **研修内容** 南多摩駅の大丸用水分量橋にて、小規模水力発電実験に参加しました。

メンバーの方が大丸用水内に入り、発電装置を設置されました。水圧は私たちが想像していたより強く、身体的にも負荷のかかる実験でした。また、単に装置を川の中に置けばよいということだけでなく、装置を支える力が必要だったり設置場所の細かい調整が必要だったり、様々な工夫が必要であることを学びました。

■ **所感** 実験で使用した「水車型の発電装置」は、メンバーの方の設計でした。装置のパーツは一つ一つが細かく、数ミリの調整で発電効果が変わるといった精密なものです。ご自宅のガレージで制作をされていると伺い、そのクオリティに驚きました。



何歳になっても何かに興味や関心を持ってトライし続けることの大切さ、かっこよさを感じ、今後の自分の生き方を考える機会にもなりました。皆様の貴重なお時間を頂くことになりましたが、研修に参加できてよかったと思っています。

■ **研修で考えた「稲城市がサポートできること」** 実験やイベント等のための活動場所の提供や、関係機関との意見交換の場のセッティング、周知活動など、市にできるサポートは様々なのではないかと考えました。市民・市職員がそれぞれの得意分野を互いに理解・尊重しながら、目的意識を共有し、魅力あるまちづくりのために共に尽力していきたいです。

稲城七つの子

研修生：長澤樹里・永峰隆登・鈴木寿和

■ **研修受入れ団体の紹介** 障がいのある子供たちが地域で療育を受けられるよう、講師を招いて音楽療法・言語聴覚療法・静的弛緩誘導法などの療育プログラム活動を実施しています。また、保護者も参加して情報交換などを行い、親睦が深められるよう保護者主体の学習会等の活動も行っています。

■ **研修内容** 実際に活動場所へお伺いし、静的弛緩誘導法を体験しました。この療法は、学校や放課後デイサービスでは行われていない、「稲城七つの子」が長く続けてきた活動の一つです。二人一組で一人が横になり、もう一人が相手の体を触りながら筋肉の緊張をほぐし、固まったところをほぐしていくことで、体の動かし方を誘導していく方法です。自分の身体への気づきやコントロール、言葉以外のコミュニケーション等に親子で取り組む様子を体感しました。

■ **所感** 静的弛緩誘導法を実際に体験することで、静かに体がほぐれていくような、体の動かし方が楽になるような感覚を感じることができました。参加しているお母さんの喜んでる姿や、感心されている様子、お子さん



の状態が短い時間の中でも変化している様子を目の当たりにし、活動の重要性を改めて実感しました。また、団体の方々が、「市役所の方が見に来てくれて、体験してもらえて良かった」と大変喜んでくださり、非常に嬉しく思いました。

■ **研修で考えた「稲城市がサポートできること」** 今後も市の職員や市民の方がこうした研修や交流を通して、市民団体の活動を理解することがとても大切だと感じました。金銭面でのサポートも大きな役割を持ちますが、障がいのある方とない方が互いを理解しあう機会を提供していくことが、非常に重要だと感じました。

NPO 法人 支え合う会みのり

研修生：望月未来・平井絢三・古谷貴史

■ **研修受入れ団体の紹介** 住み慣れた地域で安心して暮らし続けてもらうために、高齢者が抱える問題を考え、在宅福祉サービスの一環として食事を中心とした支援活動を行っています。食事作りに困っている人々へのお弁当の配達サービスや、会食会を通じ交流の場を提供しています。

■ **研修内容** 団体の歴史などについて、副理事長へインタビューを行いました。その後は食事を作ることが困難な方へ、お弁当を配達する体験をしました（お届けした食事は、小豆ご飯・大根サラダ・高野豆腐の煮物・鶏手羽煮・漬物・青菜のお浸し・味噌汁）。

お弁当の食数や配達先の件数の確認をした上で配達し、暑い日だったので保冷剤も積み込みました。

■ **所感** 配達先の事情に応じて気を付けなければならないことが多く（例えば、インターホンを鳴らさずに玄関前に置く、配達車の駐車スペースがない等）、時間も正確に守って配達する必要があるため、想像以上に大変でした。しかし、届けた際に喜んでくださる高齢者の方が多く、やりがいに繋がりました。同時に、一人暮らしの



高齢者がもっとコミュニケーションをとる場の提供が必要だと感じました。

■ **研修で考えた「稲城市がサポートできること」** 市民活動団体と関わりのある所管課のみが、活動内容を知っているだけではいけないと思います。横の繋がりを意識し、市全体で活動団体の情報を共有する仕組みを整えたいです。職員全員が関心を持ち、複数課にまたがって実施できる事業やサポートを考える必要があるでしょう。また、市民へ情報提供を行うことで、市民活動団体の認知度を向上させることができると考えます。

NPO 法人 ふれあい広場ポーポーの木

研修生：石寺真由子・伊東滋子

■ **研修受入れ団体の紹介** ふれあい広場ポーポーの木では様々な事業を行っています。向陽台にある事務所は「生活支援サービス拠点向陽台」として、NPO 法人の運営、在宅支援・居宅介護支援を行っています。また、平尾ではコミュニティ喫茶を運営しています。地域の関係団体や行政と協働しながら、地域の困りごとを解決する糸口を探し、安心して暮らせる街づくりを目指しています。

■ **研修内容** コロナ禍の状況を鑑み、オンラインミーティングで在宅支援事業に参加しました。座ってできるストレッチ体操や口腔体操、脳活性化トレーニング等を楽しみ共有しました。終了後は、団体の代表と支援者にインタビューを行いました。

■ **所感** 座ったままの体勢でも様々な動きができることに驚きました。参加している方々が全員笑顔だったことが印象的で、体操を楽しまれていることが伝わりました。

運営については、時代の流れによる価値観の変化が、世代交代の壁のひとつとなっていることを伺いました。実際には、「ボランティア精神」だけで助け合えるほど余裕はないかもしれませんが、地域で手を取り合うこと



がいかに大切かを感じることができました。

■ **研修で考えた「稲城市がサポートできること」** 地域の高齢化と併せて支援の担い手も高齢化する中、市役所から団体の活動内容についての情報を発信することで、若い方も含め、少しでも多くの方が興味を持つきっかけとなしてほしいと考えました。所管課だけでなく課を跨ぐ連携を意識することで、より良い市民サービスへつながると思います。

NPO 法人 市民活動サポートセンターいなぎ

研修生：横山絵里・藤田勝彦・大賀そのか

■ **研修受入れ団体の紹介** サポートセンターいなぎは、行政と市民活動、市民と市民活動をつなぐ中間支援組織として、「市民団体の活動支援」「市民と行政の連携強化」を図ることで、稲城の協働のまちづくりに貢献しています。

市民同士の交流を促進する事業、国際交流に関する事業、会報「ニュースレター」の発行、市民活動に関する情報の提供など、協働のまちづくりに向けた幅広い取り組みをしています。

■ **研修内容** サポートセンターいなぎにて「行政と市民との役割分担と連携」などをテーマに意見交換を行い、約1時間半の有意義な時間を共有しました。出席者は理事長、副理事長、3人の理事の皆さまとサポートセンターいなぎの事務局長でした。

また、今回の協働研修の内容を紹介するため、記事原稿の作成など「ニュースレター」の編集業務を行いました。

■ **所感** 長年地域で活動されてきた皆様のお話を伺うことができ、市職員の視点だけでは気づけない「協働」の



意義について、深く考える良いきっかけになりました。市民の皆さまがいての市役所だと考えます。

今回の研修での経験を業務に活かして、自主的な活動のためのサポートを念頭に置くとともに、様々な団体の活動にも参加できればと思うようになりました。団体の皆様には大変感謝しております！

■ **研修で考えた「稲城市がサポートできること」** 情報発信やイベントの提供を行いながら、それらをどちらかが勝手にお膳立てすることなく、お互いに話し合った上でサポートすることができるのではないかと考えました。また、市内で誇れる「コト」や「モノ」を探して共有することも必要でしょう。

市民協働研修発表会に参加して

市民活動サポートセンターいなぎ
理事 小川 三男

1月27日に中央文化センターホールで行われた「令和3年度市民協働研修発表会」で、今回の研修に参加された稲城市職員の皆さんの発表を拝聴する機会をいただきました。

各グループの発表では、研修生の皆さんが市民活動について真剣に考え、団体の方たちから現状や課題などの話を聞いた上で、行政職員としての立場から内容をよく吟味し、課題解決のための方策を研究されたことがよく分かりました。

協働のまちづくりを推進していくにあたり、市民と行政とは「車の両輪」の関係であり、どちらか一方が欠けても、またどちらか一方が大きかったり小さかったりしても、意図した方向には進んでいきません。

もちろん、「地域の課題は地域で解決する」ことは理想ではありますが、昨今の複雑かつ多様化している地域の課題を、行政あるいは市民活動団体だけで解決することは難しい時代になっています。また、コロナ禍によって財政的に疲弊し、活動自体の継続が難しくなっている団体も少なくありません。

そのような状況の中で、行政と市民活動団体が互いに一致協力し合いながら課題に取り組んでいくことこそ、これからの協働のまちづくりを推進する上で求められる姿ではないかと思えます。

研修の中で、「私たち（行政）のできること」「私個人としてできること」というテーマをそれぞれのグループで考え発表していただきましたが、このような意識を常に持って日常業務にあたっていただくことはとても大切なことであり、このテーマをそれぞれの職員が自分の事として考え、発表されていたことに感銘を受けました。

これからの地域課題の解決には、市民同士、行政と市民、企業と市民という3つの協働が連携することが必要不可欠です。そのため、市民協働の意義を理解し推進する職員の育成、地域課題に対し横断的に取り組む行政の体制づくりが必要であると常々感じてきました。今回の研修を通して、稲城市職員の協働に対する前向きな姿勢に触れ、一筋の光明を見た思いがしています。

発表会は3時間半もの長丁場でしたが、時間を全く感じさせなかった素晴らしい発表会でした。

ロケーションサービスをテーマに サポートセンターいなぎ理事研修

映像作品の撮影を支援する「ロケーションサービス」をテーマに、市民活動サポートセンターいなぎの理事研修を、1月18日にオンラインで行いました。

研修は、まず稲城市観光協会の徳尾会長から、多摩地域と稲城市におけるロケーションサービスの現状についてお話を伺いました。稲城市では、地域活性化のため映画やテレビのロケ誘致を積極的に進め、知名度アップを図るとともに、マップ作成やツアーなどロケ地を活用した観光事業を展開していく考えだそうです。

続いて、市から業務委託を受けてサービスを行っている

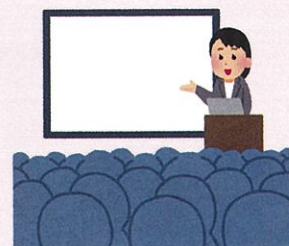
「日野撮影支援隊」の篠崎事務局長からお話をいただきました。日野市では、隣接する立川市・多摩市と連携してロケ誘致を展開しており、支援隊は会員約50名、エキストラ約600名の登録があります。ロケ誘致の効果として、宿泊業や飲食店・雑貨店等の来客増加、雇用や移住者の増加などが挙げられました。

ロケーションサービスの進め方については各自治体ともまだ手探りのようですが、ロケ誘致が地域の知名度アップにつながり、経済的にも採算の合う事業として展開していくことが今後のカギになると感じました。

今年度開催した金曜サロンスペシャル

収束の気配が見えないコロナ禍のなか、今年度も様々な事業が中止・縮小を余儀なくされましたが、金曜サロンスペシャルは予定通り年間10回の開催をすることができました。ご参加いただいた皆さん、話し手の方々、ありがとうございました。

講演の要約はサポートセンターのwebサイトで、動画はYouTubeの「市民活動サポートセンターいなぎ」チャンネルで公開しておりますので、ご覧ください。



回	開催日	タイトル	話し手	内容
152回	4月2日	霊長類とそれを取り巻く環境について	北村 征治 氏	絶滅危機に瀕しているオラウータンの生態と保護の重要性について
153回	6月4日	稲城カレーの魅力とスパイスのある生活	小柳津新一氏	カレー研究家の小柳津さんによるカレーの楽しみ方、カレーのまち稲城の夢について
154回	7月2日	ミュージカルの魅力・楽しみ方について	郡司 行雄 氏	舞台演出・振付・脚本・俳優を手掛ける郡司さんの芸能界の思い出、これからの活動
155回	9月3日	映画づくりを通して伝える身近な「生物多様性」	島倉 繁夫 氏	「三沢川いきものがたり」の制作にかかる苦労話やエピソードについて
156回	10月1日	稲城から世界へ!! INAGINE	花見 省輝 氏	音のアーティスト花見さんの半生とこれからの活動について
157回	11月5日	セカンドライフを楽しむためのコツ	田村 伸一 氏	無趣味だった田村さんが様々な趣味にチャレンジしようと思ったきっかけについて
158回	12月3日	海外よもやま話	原 忠男 氏	原さんの半生とサラリーマン時代の海外派遣にまつわるエピソードなど
159回	1月7日	新年のつどい		過去の金曜サロンスペシャル出演者、利用者との懇親会
160回	2月4日	ゆうご博士のわくわく宇宙と生物のはなし	網蔵 優子 氏	網蔵博士が宇宙の研究者になろうと思ったきっかけ、子どもたちの教育について
161回	3月4日	絵とおはなしと音楽と	YOSSAN	絵本作家・イラストレーターになるきっかけ、これからの活動について